3　カリムスカヤ

カリムスカヤでは墓地へ行く前に、野戦病院跡の現災害対策本部事務所の建物へ行く。此処は同期生4名が送り込まれ、1名だけ生還し得た。その本人加太　功と、此の地で亡くなった三谷智一の兄上も同行された。建物は昔の侭、共に闘病した病室まで残されていた。墓地迄の往復は警察署長が直接先導するパトカーにバスが続く。バス故障に備えて予備に大型輸送車を従え、ライトを点滅させて対向車を停止させながら。国賓待遇だ。勿論、日本人で此の駅に降り立ち、訪問したのは、終戦後、日本兵が引き揚げてから初めてだとの事である。

駅から約2.5㎞のなだらかな、奈良の若草山を思わす丘の中腹から上方に、簡単な鉄柵で囲まれ、後方の小さな森に隣接して墓地はあった。小さく区切ったソ連人の墓地が周辺に沢山あるが、中央部分の広場とも言える草原、そこに正面から入ると、数本の潅本が横一列に植えられていた。「その辺りに日本人を埋葬した。」と管理人がいう。古くから此の仕事をしているという。「三谷は右から3番目」死亡者が概して少なく、早期だったので記憶していた。号泣、同行したソ連人ガイドも、通訳の日本人女性も涙で通訳として声にならなかった。

4　ヒロク病院

ヒロク病院では公表125名が死んだとされている。同期生は9名亡くなったのに8名しか入っていない。何か手がかりは無いか。それが課題だった。病院は現在学校になっていた。夏季休暇中というのに、校長以下の先生方と、数名の子供達まで登校して、課外研究の勉強をしながら待っていた。建物は改造されてはいたが、殆どは昔の姿を残し、病室の間取り等はその侭で、しかも、学校以前の歴史が写真と共に掲示されて居り、学校の表札の下に、過去に病院であった事を示す掲示札も並べて掲げられていた。更に、当時勤務していた看護婦キスリッア・タマラ・ウラジミロフナを呼んでくれた。墓地は現地案内人も熟知して居らず、病院裏の東部山中に案内され、発見できた所は、病院墓地ではなく、現地に存在した収容所の犠牲者の墓地だった。公表資料にもない、新しい発見。そこには、324柱が眠って居る。慰霊をして移動した。病院墓地は東南に大きな道路のある松林と墓地域を示す図面があるだけ、見当違いの所を探し回り、半ば諦めて宿舎へ帰る途中、ゴーリキー通を歩いている古老、一九一三年生れに導かれて、暫く友の眠る墓地へ辿り着けた。慰霊行為をしたが、公表に無かった林茂弘に関する記録には尋ね当らなかった。

5　ペトロフスク

ペトロフスクでも分院は学校となって居り、建物や間取りも変らず、出入口は北から南へ変更されていた。本院は少年サナトリウムとして昔同様の使途であったが、柵で囲まれた敷地内では、幾つかの建物が変更され、時の流れを感じさせた。病院に勤務していた看護婦オリガが呼び出され、当時の消息を告げ合った。駅から至近距離の病院と違い、墓地は若干迂回せねばならず、シベリア本線の西側の山を越えた所にあった。嘗てソ連の人達がコンクリートで大きな慰霊碑を建ててくれていたのだが、訪れる者とてなく附近の民家も移転し、碑は倒壊した侭で無残な姿、説明されなければ碑とは思えず、石片に過ぎなかった。だが、此処は他とは違った。病院であったので、死者の埋葬をソ連人が行ったのだろう。埋葬場所の図面に番号、別に番号に合わせた埋葬者名簿一覧表が存在し

た。陸橋の西方道路から100ｍ程入った山の中の高地部分の頂上部に5・6月、に集中して多量に亡くなった129名が纏めて埋葬されていた。従って、宇高淳、窪木勝雄、松野久の3名が一緒に葬られていた。7月以降には死亡者の発生数が落ち着いたので、一人一人個別に下から順に埋葬された。伏見弘、その隣に橘昭次、少し上に竹内嘉信、その並びに漆畑唯司、2列ばかり高い所に真山浩一が図面通り特定された。記録にはないが、昭和23年8月28日、病院閉鎖の直前に亡くなったとされる藤巻英雄も恐らく此の地だろうと推測した。公表は247名だとされているのに、現地の名簿には病院で更に3名、別に病院以外で28名が此の墓地に埋葬されて居た。これらの新しく知り得た事実は帰国後、厚生省に報告した。